

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第十九卷 「人文科学（一の九）」

民俗学、民族学、文化人類学、文明・宗教の発祥・展開と人間の発達  
(二)

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十九巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、民俗学、民族学、文化人類学等、とりわけ文明の発祥と人間の発達の関係の考察に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳〜十九歳

第二編 二十歳〜二十九歳

対女性共感覚とは

対女性ミラータッチ共感覚

研究中テーマ & 自伝・エッセイ・論文等まとめ

共感覚の再獲得には「悲劇」が必要

対女性共感覚雑感

第一部 京都講演 感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈こ

とば〉〜共感覚、自閉症、幼児の体験世界〜

第一章 講演します

第二章 感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉

〜共感覚、自閉症、幼児の体験世界〜 共感覚とは

何か 配布テキスト

第三章 感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉

〜共感覚、自閉症、幼児の体験世界〜 共感覚とは

何か スクリーン映写テキスト

第四章 AからだVとAことばV

第二部 ヒトのからだ、こころ、ことば 共感覚を通して・

女性施設における講義・講話・教育活動用資料

第三部 今西錦司

第四部 梅棹忠夫

第五部 三木成夫

第六部 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心についての

一考

第一章 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心について

の一考（その一）

第二章 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心について

の一考（その二）

第三章 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心について

の一考（その三）

第三編 三十歳〜三十九歳

第四編 四十歳〜四十九歳

第五編 五十歳〜五十九歳

第六編 六十歳〜六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

対女性共感覚とは

二〇〇八年四月十二日 起筆、攔筆、公開

一般に、ヒトのオスがメスの排卵を感知できないことは、皮肉にも「隠された排卵」と呼称される。ところが、一部の言語障害者・自閉症者などの男性、そして管理人の私には、女性の排卵は太古のまま「隠されず」、「見えて」しまうことがある。管理人はこれを「対女性共感覚」と呼称している。

■対女性共感覚の概論■

●一般の共感覚や女性の共感覚との違い●

数年の間に管理人の研究にご協力頂いた共感覚者女性のうち、一割の女性には世界の全ての文字に共感覚色が見えていることが分かったが（残りの女性は、一部の文字や音に色が見える）、男性に対する女性特有の共感覚は見当たらない。ヒトの男性では性欲が常時化しており、女性には男性の発情期を特定するような能力は必要がないためであると考えられる。

一方、男性では興味深いことが見られる。メスの排卵や月経を遠方から感知する能力は、むろん、ヒト以外の動物のオスでは持つていて当然の感覚であり、これがないと種の保存が不可能で、人類が「言語」と呼ぶ意味での言語コミュニケーションを問わずに性欲を保持し、きちんと発情期に合わせてメスへの配偶行動をとれるのであるが、この能力を持った人間の男性は、ただでさえ少なくなっているばかりか、九十五%以上がいわゆる言語障害者・知的障害者であることが管理人の諸研究で判明し、健常者として生活している男性は極めて少数で、ただし、ほとんどは一般の職に就くことが困難である。

女性には、現在でも太古以来の発情期の名残があり、排卵や月経の前後に体調・心理状態・性欲の変化が見られるのは周知のとおりである。対女性共感覚は、「男の生理」であるとの見方も可能である。

●当共感覚の原始性・古代日本性●

また、明治・大正生まれの男性には対女性共感覚を持つ健常者もいるが、今の若い十代・二十代では、今のところ筆者以外には、健常者の男性は見つかっておらず（三十代では、対女性共感覚をサイトで告白している男性もいる）、研究が極めて困難であり、管理人も次

第に感覚を失いつつあり、今はなるべく早急で忠実な自らの感覚体験の記録を進めているところである。換言すれば、男性（オス）にとって普遍的であったはずのこの共感覚を残しながら、かつ近現代社会に通用する言語能力を後天的に獲得することは、奇跡的であると言える。

さらに、この共感覚を持つ男性は、健常者であっても、必ず読字障害（ディスレクシア）、不思議の国のアリス症候群、閃輝暗点性の偏頭痛、離人症のいずれかをかかえ（管理人はこれら全てを持っている）、例外なく自閉症ないしアスペルガー症候群の傾向を持っている。

### ●言語学的視点からの管理人の研究 ●

管理人がさらに言語学的な研究を試みたところ、主語優勢言語（英語やフランス語をはじめとする文明先進国の公用語）を母語とする男性には、対女性共感覚はほぼ皆無と言ってよく（欧米の共感覚研究で扱われないのは、この共感覚自体がほぼ存在しないため）、今や極めて少数の日本人・朝鮮人・中国少数民族・台湾先住民族・アメリカインディアンなどの古形の主題優勢言語母語話者の男性にのみ残存するものである可能性が分かってきた。

全ての文字に対して共感覚を持つ男性にとっては、文字は原始的風

景であって文字という認識がなく、これが文字であることを知るの  
は、社会から得た知識でしかないとさえ言え、対女性共感覚の有無  
の一つの判断基準・証左となっている。

「女性の排卵・月経が衣類の上から感知できる能力」が全て「共感覚」であるということは、最も注目されるべきことである。すなわち、いわゆる五感しか持たない欧米先進国や現代日本の一般男性は、この能力を「認識」することは生涯ない。従って、この能力を現代日本語や現代英語によって一般男性に説明・伝達するということが困難を極める。

管理人は独自に世界の少数民族言語の文法を調査し、これをもとに、名詞や動詞の部分のみ現代の日本語を適用して、日本の言語障害・知的障害を持つ男性に会話を試みたところ、これらの男性の中には高確率で女性の排卵・月経を共感覚で感知する男性が見つかった。すなわち、当共感覚は、現代日本語や現代英語で記述すること自体が不可能で、逆に日本の古語文法や少数民族言語の文法では記述可能である性質のものであることが明らかとなった。縄文・弥生時代の頃には、当共感覚を持った男性は少なくともなかったと考えられる。

これは、当共感覚が、「サピア・ウオーフの仮説（言語的相対論）が現代のほとんどの非共感覚者男性においては成り立ってしまうこと（一般男性の知覚・思考は、自らが身に付けた西洋的な文法がコン

トロールして、それ以外のことが知覚・思考できないこと」、また「チョムスキーの言うような生成文法は、分裂した五感を持った近現代の白人男性や日本人男性の視点からの一説にすぎないこと」の証左となることを意味する。すなわち、男性（オス）ないし（子供を含めた）人間にとっての普遍的文法や普遍的知覚世界は、むしろ共感覚者の男女の知覚世界に基づいて記述されねばならず、現代欧米や現代日本の男性の五感世界は、動物史上極めて特殊な事態を呈しており、むしろオスの知覚の普遍性と対立することが分かってきたと言える。今後、現代英語を小学生から教えるような時代が来たとすると、もっと急激に女性に対するこの共感覚を失うことになると考えられる。

【現在、判明している対女性共感覚の特徴】

- ほとんどの場合、女性の衣類の着用の有無を問わない。（言語障害を持つ既婚者の証言。ただし、和服のほうが感知しやすい。）
- 女性との物理的距離には影響を受ける。（管理人は、排卵については、女性からおよそ三メートル以上離れると感知できない。月経は、約十五メートル以内。）
- どんな場所・状況・天候で起きるかほとんど予測できないので、実験が不可能だが、対象となる女性の傾向は自覚している。
- しばしば脈拍の増加・発汗・軽度の発熱・偏頭痛・視野の狭窄・

吃音・離人症状などを伴う。閃輝暗点性の偏頭痛の場合、歩くことも困難になる。

- 主に自分と同世代か、その周辺の年齢の女性に対して起こる。（筆者（二十六歳）の場合も、初潮直後の十代女性から三十代前半の女性がほとんどである。）
- 他の五感と同様、障害物・過度の電光や騒音がある街中では感覚が阻害される。
- 昨今の女性のファッションの多様化や欧米化、厚化粧、頭髮の染色、ピアスなどによっても感覚が阻害される。
- 一般的な触覚または体性感覚器官以外の感覚器官によって、女性の身体に触ることができるとある。（例えば、女性を目視すると、目視した部位を手などで触ったのと同じ感覚を得ることがある。（＝脳機能局在説の普遍性への反証）
- 知人関係または配偶者関係にない女性に対して、しばしば罪悪感を伴う。
- しばしば感動・喜び・寂寥感・不安感・疲労感・終末感を伴う。
- 女性の共感覚色の美観が恋愛感情の発現の直接的な要因になりうる。
- この共感覚を持つ男性のほとんどは言語障害者であり、健常者として社会生活を送っている男性は稀である。
- 母親・恋人・妻・姉・妹・娘・祖母・友人女性など、肉親や恋愛・知人関係の女性の中に性犯罪被害や虐待・暴力被害に遭った女性がいる男性は、対女性共感覚を成人を過ぎても高確率で残す。

●父親や兄弟・親類の男性が対女性共感覚者・共感覚者であるか、またはその傾向が強いことが多い。

●この共感覚を持つ男性の家系の女性は、初潮が遅い。

●言語コミュニケーションが得意でないなどの自覚があり、一見すれば、男性にしては消極的性格に映る男性が多いにもかかわらず、当人は、自身の性的欲求が同世代の男性に比べて強いことや、対女性共感覚が男性の普遍的な性的能力であること、女性（メス）を他の動物や男性（オス）から守るための防衛本能であることに、10代の早い時期から気付いている。

●異性愛者の男性のみが持ちうる。同性愛者の男性や性同一性障害の男性には存在しない。ただし、常染色体の異変には全く左右されない。（ダウン症候群の男性でも持ちうる。）すなわち、性愛が女性に向かっているということがこの共感覚保持の絶対的条件である。

### 対女性ミラータッチ共感覚

二〇〇八年四月十二日 起筆、擱筆、公開

ミラータッチ共感覚のうち、特に男性において、女性に対してしか起こらないミラータッチ共感覚を自覚する者が散見される。これを管理人は、自身の造語「対女性共感覚」と海外の研究者の命名である「ミラータッチ共感覚」とを合わせて、「対女性ミラータッチ共感

覚」と名付けた。

これは、女性を目視したとき（まれに、女性の声を聞いたとき）、女性の身体や衣類に実際に触れているときとまったく同じ触覚が男性の中に生じる共感覚である。特に、目視の場合には、見ている女性の身体の部位と触覚とは、ほとんどの場合一致し（足を見ると、足への触覚が生じる）、これが内外性器に及んだ場合には、むしろ恍惚感よりも極度の罪悪感を生じる傾向がある。

時に、女性の卵巣や卵管・子宮付近を自我が通過する感覚を覚える、衣服の有無に関係なく女性の身体に触覚が達する、など、激しい肉体的・精神的消耗を伴う体験が、数週間〜数年に一度あり、女性の排卵・月経などの生理現象が完全に把握されることがある。日常生活に多大な支障をきたす。

さらに、第三者が女性を実際に触れている光景を目視したときに、その第三者に自我を転写させ（すなわち、第三者の肉体を借りて）、女性に対する第三者の触覚を感じることができるとある。この場合、自身の肉体と第三者の肉体との区別は、多分に曖昧であると自覚され、ただし現実検討能力は維持される点に特徴がある。このことは、対女性ミラータッチ共感覚が、離人症性障害と近縁の関係にあることの一つの証左となる。

特に日本人男性の中には、告白者が多数おり、一般の共感覚と違って、若者ほど極端に少なく、戦前生まれに多い。戦争や災害などで、子孫を早急に残す必要がある場合には、多くの男性がこの共感覚を蘇らせた可能性を示唆する。ただし、生まれたばかりの男児は、保持している可能性がある。

（三十代男性がご自身のサイトでこの共感覚を告白していらっしやいます。）

<http://www1.coralnet.or.jp/nobuyosi/syn/taiken.html>

ただし、対女性ミラータッチ共感覚は、複合的な共感覚と言うよりは、一個の絶対的な共感覚として自覚されるものであり、また、女性の身体への触覚のみが起こり、排卵・月経を感知しないことも多い。

### 研究中テーマ & 自伝・エッセイ・論文等まとめ

二〇〇八年五月三十一日 起筆、攔筆、公開

#### ★研究中テーマ

● 神風連の乱、敬神党の共感覚者集団性と宇気比

● 能格言語の世界分布と共感覚の相関関係の研究

● 勅撰和歌集が恋の部から排除した独立的な嗅覚表現と、代わって積極採用した対異性共感覚表現

● 和歌の初生感について

● 共感覚と擬音語・擬態語によって作られた玉葉・風雅和歌集について

● 「さき」「やがて」「から」「より」「思ふ」「こころ」「あはれ」等の共感覚性と二元性について

● 「のみ」と「ばかり」の極端な男女差が数百年に渡ったことと共感覚との関係について

● 「さらさら↓さらさらし」、「さわさわ↓さわぐ」、「そよそよ↓そよぐ」等、擬声語+接尾辞の形で形容詞化・動詞化することが全面的に許される言語の、海洋・農耕民族性について

● 食糧自給率の低下が日本人の共感覚の喪失にもたらす影響（人体が生じた土地と摂取する物質が生じた土地とが隔離することによって起こる人体への影響）

● 擦弦楽器と撥弦楽器の日本海における断絶について

● 全ての黎明期人類言語の抱合語性・膠着語性について

● 切腹と共感覚及び離人症状について

● 道元の曹洞禅及び「正法眼蔵」が持つ対異性共感覚性について

● ロンドン、クノップフ、モロー等の象徴主義画家と共感覚

● 「違くない？」（動詞活用と形容詞ク活用が混在）、「くみたく」（形容動詞活用と形容詞ク活用が混在）等の若者言葉の品詞変動と、日

本人の共感覚性の急速な消失について

（「同じだ」（形容動詞）の反対語「違う」（動詞）が意味する「複数の要素が相容れない性質を持つ」ことが、英語の「be different」と同じ形容詞として日本人の脳に知覚されるようになったことの危険性について）

●日本人が音読を離れた時期（＝黙読ができるようになった時期、明治半ば）がヨーロッパ言語（屈折語）文明圏よりも百数十年遅かったことについて

★研究者などへの提供済み（予定）論文・自伝など

- 対女性共感覚に基づく着物の色目の考案
- 日本人の色彩感覚の危機に関する私見
- 恋情と共感覚に関する自伝的考察
- 衣服の色彩が性欲及び性犯罪等にもたらした影響について
- 和服を日常的に着ている日本人女性の生理周期の色彩が、そうでない女性に比べて安定していると私の共感覚において知覚されている現象について
- ピアスなど、体の一部に生まれ持った穴以外の穴を開けた女性への共感覚が、穴の該当部位以外（手足など）にも日常的に影響を及ぼして知覚されている現象について（私が見ているものが、いわゆる「氣」のゆがみ」に該当するものであるかについての、科学

的見地からの考察の嘆願）

●私は何を感覚しているか —ある日本人男性の共感覚世界—

●「心」の所在について

●日本の伝統音楽と建築の南方起源性

●「黙読」はホモセクスピエンスセクスピエンスにのみ可能であると考える理由及びその考察

●私はなぜ黙読ができなかったか（風景と文字との区別が人間において、いつ、どのようにして起こったかについての、自らの幼少時の記憶からの説明）

●私の幼少期の計算方法について 「32+75＝瑠璃色・紅色+菜の花色・常盤色＝水色・黒色・菜の花色＝107」

●言語障害者の知覚世界が共感覚の「最も豊かな」様相を呈するものであると考えることについて

●特定の交差点を通ると体の一部に異変が生じる件、及び日常的に迂回して通る電線箇所記録について

●共感覚と偏頭痛を併発する男性の性欲の強度が一般のそれよりも高い可能性についての検証の嘆願（2006）

（なお、その直後にアメリカの大学が、偏頭痛の男性が実感する性欲レベルが、一般のそれよりも高いことを実証）。2006年。）

[http://www.eurekaalert.org/pub\\_releases/2006-06/wfub-mh060906.php](http://www.eurekaalert.org/pub_releases/2006-06/wfub-mh060906.php)

最後の話題などは、アメリカはやるのが早すぎるなど、さすがに笑ってしまいが、あとはこれを倫理観とどう結び付けて説明するかに注目したい。当然ながら、性欲が強いことが、そのまま倫理観と人間性が欠如していることにはならない。このような視点の柔軟性は、もはや日本から失われて海外に移ったような気がして残念な限りである。むしろ、正しい性欲というものを知らない人が多すぎるから、ダメなのだと思う。今話題の事件みたいに。性犯罪をなくするためには、もっと日本の男が共感覚に生きないとダメだ、そうしないと日本は終わる、とさんざん言っているのだけれど、科学者にとっては、そんなことはどうでもよくて、とにかく僕の脳ミソを開けて調べたい模様。そのたびに、少し寂しいと思ってしまうのはどうか。

### 共感覚の再獲得には「悲劇」が必要

二〇〇九年五月七日 起筆、擱筆、公開

共感覚が、もともとは人類皆が持っていた知覚世界であり、今でも赤ん坊なら皆持っている知覚世界であろうことは、様々な証拠からそう言える。僕も思っているが、「共感覚を成人しても維持するかどうか、家庭環境・生い立ち・人間関係に大きく左右された例は、今のところなぜか見当たらない」という事実は、この「古代人類・

幼児 総共感覚者説」を裏付ける最たる根拠かもしれない。

共感覚者には、言葉や歩き始めるのが遅く、なおかつ、無理やり言語を教育された、歩行器で歩かされたなどの親からの圧迫がなかった人が多い、あるいは、比較的温かな家庭で育った、といった傾向はあるが、それでもそれを共感覚維持の一要因と断定できるほどには、一般の人との差はない。

我々は思わず、「親の愛情を存分に受けて育った子は、豊かな感性・共感覚を失わずに済むし、だからこそ将来、同じだけの愛情を自分子どもにも注ぐものだ」と言ってしまう。幼児期に父親からの暴力を毎日のように受けていながら、五十歳を過ぎても平仮名に共感覚が見える（「な」が紫色、「し」が水色・・・）女性の例もあれば、中高時代に近所や知人の男性から信じがたい性的被害を受けていながら、成人後まで共感覚を残し、礼儀を持って人に接することができる二十代女性もいる。

親や地域社会から「正しく」育てられなくても、感性的な生き方を誤らない人がいる現実には、どういう生命原理がはたらいっているか。ヒトの体には、親の育て方とは無関係の、生物としての普遍的な知覚原理・防衛本能が備わっていて、共感覚はその普遍的な知覚原理・

防衛本能を別の言葉で言ったものにすぎないと言えそうである。逆に言う、どんなに近現代的な価値観を身に付けてしまった今の親でも、子どもが生まれ持った動物的能力に介入し、それを改変することは不可能である。

また、一度失った共感覚が数年、数十年後に蘇った例もあって、例えば10代や20代で性的被害に遭った直後に幼少期以来失っていた共感覚が蘇った、という女性には数人に出会った。しかし、これもあくまでも「性的被害が共感覚再生の要因となった女性が確実にいる」ということを示すだけであって、被害を受けたからと言って共感覚が必ず戻るわけでもないし（戻らない女性のほうが多いわけだし）、そもそも共感覚者のほとんどは、「共感覚は生まれつき持っている」と述べている。幼児期に両親から愛情を持って育てられたか、虐待を受けたか、といったことには、なぜか関係がないように統計上は出る。

性的被害者女性の占める比率は、一般女性と、僕が調べた共感覚者女性とで、あまり変わらない。あまり変わらないのに、「性的被害が共感覚再生の動かしがたい直接的要因である」ということだけは、一部の成人共感覚者女性にとってはつきりしている。それは、一生にかかわるような重大な自覚である。そのような女性の数だけを見れば、圧倒的に共感覚者に多いということになる。「親から愛情を受けて育った女性の共感覚」と「男性から性的被害を受けて育った女

性の共感覚」とが全く同じ内容を持ち、一般の大多数の女性だけがそこは別世界の、共感覚を完全に失った五感に生きている。

これらの事実を矛盾なく説明する方法は、たった一つしかない。「全ての女性は、生まれたときには性的被害を受けたときと同じ心理状態にある（その心理状態を知っている）」と言ってもかまわないということである。そしてこれは、実は正しいだろうと僕は思う。言い換えれば、「人間はどういうことをされるとつらい思いをするか」などの「道徳」や「倫理」、「社会性」といったものは、成長するにつれて身に付けていくものだ。一般には思われているけれども、そうではなさそうだ、ということである。親の役割は、子どもがもともと持っている感性・道徳を「引き出す」手伝いすることなのであって、それらを子どもに無理やり「身に付けさせる」ことではない、ということだろう。言い換えれば、男児であれば、水や土などの自然に触れさせる、といった以外のことは放っておいても、「他人や社会や女性に対してやって良いことと悪いこととの判別は付く人間に育つ」ということだと思う。

僕とやり取りしている生理学者・心理学者の多くは、僕のこういう考え方自体に今でも否定的であると感ずる。一方で、僕とやり取りしている養護学校等の現場で働く教師の皆さんは、僕の考え方に肯定的である。真つ二つである。学者たちは、性的被害による女性の

「心的ショック」は、知覚・五感のあり方とは無関係に受けるショックであり、共感覚が蘇ったという現象も、その性的被害をきっかけとして脳の配線が何らかの物理的・化学的变化をこうむった結果であって、「女性の心の本質」とは関係がないと見なすようだ。従って、「健常者女性」であれば皆、心的ショックは同じ大きさであると見なすし、一方で、自閉症者女性・共感覚者女性は感情が乏しく、性的被害による「心的ショック」そのものも健常者女性よりも深く体験しないのだと見なしてしまう。

そもそも、一昔前までの自閉症者に対するマニュアルには、「自閉症者には感情が存在しない」と書かれていたが、ほとんどの大学関係の研究者は、潜在的にはその人間観を踏襲していると思われる。つまり、健常者女性に対する性的暴力は、「我々社会的人間らしい後天的な道徳」に反するから、という理由で「駄目だ」と言い、自閉症者・共感覚者女性に対する性的暴力は、「健常者女性とは脳の配線が異なり、感情も動物的で、被害という意識もあまり感じないから、守ってやらないといけない」という理由で「駄目だ」と言う。僕の考え方は、それとは全然違うようだ。自閉症者女性や共感覚者女性が性的被害を受けたときのショック症状は、ほとんど動物のメスのそれに同等であると僕は予想していた。ただし、予想するばかりでは、学問としてはアウトなので、実際に性的被害に遭って言語を失うほどの心的ショックを受けた共感覚者女性を見つけてくる必要があった。それで実際に見つけてきて、独自にお話を聞いているのが

僕の研究、というわけだ。

例えば、PTSD(心的外傷後ストレス障害)というものは、文字通り、心的外傷を受けた人が陥るということで、最初からそういう名を付けているのだろうが、共感覚というのは、根本的にそういうものは事情が違っている。「性犯罪のような重大な心身の損傷を伴う体験は、共感覚の再生の直接的要因となりうる」とは言えるが、「共感覚は、重大な心身の損傷を伴う体験をした人が持つものだ」というのは全く成り立たない。幼児期に共感覚があった、という明確な記憶がない女性は、成人後に性的被害を受けても、もはや五感そのものには何の変化も起こらない。視覚や聴覚といった五感の上に、「つらい」とか「死にたい」とかいった感情が乗っかっているだけである。

そうなると今度は、「性的被害を受けて共感覚が蘇るほどのショックを受けた女性の心的外傷の大きさ」と「性的被害を受けても何の知覚の変化も起こさなかった女性の心的外傷の大きさ」とを、本当に同じものと扱ってよいかという、とんでもなく難しい問題が生じる。「そう扱ってくれるな」という暗黙の訴えを、共感覚者女性の存在は否応無しに示してくる。

もし共感覚が、「選ばれた人」のみが獲得する能力であるなら、「生まれつき持っている」などという証言は消えて、性的被害や暴力被

害など、因果関係が極めて明確な事態ばかりが特権的に浮き彫りになり、かつそういう被害者の共感者に占める比率が、一般女性と比べて上がるはずである。しかし、そうはならない。その男性バジョンの典型が、まさに僕である。親から虐待されたわけでも何でもない。男性として生まれ持った能力を記述したら、こういうブログになったというだけである。

他にも、何の虐待を受けることもなく、兄弟間で知的レベルを比較されることもなく育った共感者はたくさんいる。それなのに、なぜか家族の中で「自分だけが」共感覚を持つ。多くの性的被害者女性の中で「自分だけが」共感覚を再び取り戻す。なぜそうなのか、何かの病気か、などと自分で考えても、答えはない。そもそもヒトなら誰にでもくっついてくるものが共感覚なのだから、先天か後天か、健康か病気か、と問うこと自体に意味がない。そういうことを問うてさえない人たちが、健常者から見れば知的障害とか自閉症とか言われているだけのことであるだろう。

色々な脳科学者や心理学者が、後天的に共感覚を獲得できるかどうかを研究しているようだが、あとから共感覚を持つことがいかに大変なことかを、やはり身を持って知ったほうが良いと思う。もう何度も書いているが、共感覚を失った日本人男性が再びそれを取り戻すには、戦争が起こるか、食糧の輸入がとだえて困窮するか、そういった天変地異が起こらない限り、無理なのではなからうか。

むしろ、再び獲得するためには死に迫るほどの体験を必要とするこの共感覚を、どうして多くの人はいとも簡単に失うのか、そちらのほうを研究してほしいと思う。

### 対女性共感覚雑感

二〇〇九年十一月二十六日 起筆、擱筆、公開

先日の早稲田大学での講演は、私の著書の難解な部分を分かりやすく口頭で話す機会であったと同時に、私の対女性共感覚を私と年齢の近い学生さんたちに（もちろん、先生方や一般の方々にも）公表する機会でもあった。

対女性共感覚の実感がいかに禅的境地や和歌の「有心」「縹渺（ひょうびょう）」に近いかということを、簡単な言語学の方法を使って話してみた個所もあり、うまく説明できたかどうか自信がないが、問題提起できただけでも良い機会だった。女性に接触したのと同じ触覚を、女性を目視するだけで得られる「ミラータッチ共感覚」についても、誤解を避けるために、二〇〇七年に頬と手を用いた実験で検証された例を講演でも紹介した。

むしろ、男性に対して直接口頭で話す機会はあるのだが、多くの女子学生に向かつて話す機会は今までなかったもので、思い切って対女性共感覚の内容を盛り込んでみたのだ。今でも対女性共感覚を話すことには多大な勇気を要するけれども、それによって我々がぼんやりと想像している太古の人類（男性）の知覚世界が少しでも判明すれば、対女性共感覚者冥利に尽きると思う。

最近では、対女性共感覚について新たな視点も持っている。これまでは、対女性共感覚は現代のほとんどの男性が文明の進展・人口の過密化に負けて「自発的に」失ったものだと思っていたが、これも間違いではないものの、やはり女性にも原因があると思える。要するに、「高度な文明社会と対女性共感覚とが相反すること」に変わりはないが、「対女性共感覚の喪失」には女性の身体の変化が潜在的に加担しているかもしれない。

日本では一九四〇年前後までは、男性の精通年齢よりも女性の初潮年齢のほうが高かったため、男性ばかりが射精して、女性はさっぱり体の準備ができていません、という時期があったわけだ。その年月は、一九三〇年で三か月、一九二〇年で半年、さらに遡るとほとんど差が開くが、明治前期で安定して、それ以前（江戸時代以前）には、おそらく二〜三年程度であっただろう。（幸いなことに、女性の正確な初潮年齢については、明治時代からずっと統計が残っている。）

そして、この時期こそが、我々男性の動物的能力が最も光輝くときであったのかもしれない。自分たちは先に大人になっておき、さて次ほどの女性が初潮を迎えるかを見計らって待っている。このような状況が、江戸時代までの日本人男性には共有されていた。・・・と、このあたりまでなら、単なる知識の問題で、専門家には共有されている知識だと思う。

しかし今、昭和・平成を生きる我々男性にそういう時期が存在しないのは周知のとおりである。女性の初潮年齢は、かつて欧米よりもずっと高かったのに、欧米以上のスピードで低年齢化し、北欧数カ国を除く欧米先進諸国の水準になり、一九四〇年前後を境に、男性の精通年齢をはるかに下回ってしまった。

一八八〇年には平均初潮年齢十四・八〜十五歳、今で言う高校生になつてから初潮を迎える女性が三十%以上、沖縄・東北・北海道・八丈島など地方では十六歳前後、沖縄宮古では十六歳以上。十七歳で初潮が来なくても、焦る女性などいなかった時代である。それが、現在では平均十二・二歳。過疎地では、逆に生殖機会を増やすための反動で、青森十一・七歳、秋田十一・九歳など。全国平均も、もうすぐ十二歳を下回るだろうと言われている。先日、「最近の女子児童は七・八歳で初潮を迎える子もいる」という話を聞いて、ひっくり返りそうになった。私くらいの年齢の男性はもはや全然驚かない。

いらしいが（驚かないのがおかしいと私は思うのだが）、戦前生まれの男性は皆、やはりひっくり返りそうになるようだ。

そして、我々男性がこの女性の早熟化に対抗しようと思つたら、〇歳くらいで精通しなければならぬわけで、そうでないと動物として大変に不条理であるわけだが、そんな頑強・早熟な肉体機能を、我々人類のオスは有しておりません。ゆえに、女性の初潮の低年齢化をただ見届けて、自分たちはその場にとどまるしかない。それがちようど、あの悲惨な戦争の時代であつた。事実、確認できる統計だけを見ても、男性の精通年齢は上がったり下がったりで、食生活の欧米化・肉食化のわりには、明治以降から今まで急激な変動はななく一定している。銃後の女性たちだけが、若くして初潮を迎える体を持ち始めた。

女性の初潮年齢が男性の精通年齢を下回るとするのは、大変なことである。いや、もしかしたら、人類が動物でなくなったということかもしれない。少なくとも、過去数十万年間に人類が自然な動物の一員としてやってきたこととは違うことを、ここ百数十年の人類は体験しているわけです。日本人ではここ数十年の話です。

我々男性が精通を迎えたときには、周りの女性たちは皆、初潮を済ませて「くれて」いるので、男性側には生殖と性欲とが結び付いていする必要がなくなる。種の存続のためという意識がいらなくなる。

「次はどの女性が初潮を迎えるかを知らなければならぬ」などという責任感・使命感や知覚能力もいらなくなる。いらぬから、本当に捨てた。ところが、捨てられない男性が、なぜか少しだけ残つた。そういう「生きたシーラカンス」のような能力が、私が持つている排卵・月経感知能力すなわち「対女性共感覚」と私が呼称するものであるなら、この能力の喪失は、日本人男性においては、そう遠くない昔の話なのかもしれない。

もし今、急に女性の初潮年齢が江戸・明治・大正水準（15歳くらい）に前戻つたとして、そのときに今の男性がどうなるかということに思いを巡らせる日々である。たかが思考実験だが、されど思考実験だという気がしてならない。

私も普段は、排卵をどう感知しているのかと質問されたら、「あの女性の周期がそろそろ口短調の紅梅色だから、もうすぐ排卵する、という具合だ」などと表現するが、「口短調」や「紅梅色」というのは、現代日本語に合わせて言っているだけで、実感はそこにあらず、心の中では常に縄文時代や平安時代の我々男性がどういう能力を持っていたかを考えて、もはや投げかけても直接には返ってこない過去の男性に一方的な友情を抱いているわけである（！）

もし再びそうなつたら、我々男性はラッキーとばかり言っていられなくなるだろう。もしかしたら、焦るかもしれない。すなわち、「自

分たちばかりが射精して、目の前の女性たちは何の体の準備もできていない」年月をどう過ごすか、ということについてです。

（というより、こちらの状態こそが日本人男性の肉体の「標準設定」であり、平安時代の通い婚も江戸時代の色恋文化も、この自然動物状態を基盤に成立しているわけであるから、本当は日本語史も天皇観も古代文献も和歌も、全てこのような視点から語られるべきだと思いが、結局今の歴史とは、すなわち大多数の研究者の男性の五感が、極めて限られた発掘資料・文献と科学技術をもとに観測・解釈した結果であって、我々がいかなる動物であったかという情熱や執念のようなものは、忘れられているように思う。）

とにかく、この年月を再び我々男性が過ごすにしても、決してラッキーで至福の年月にはならないだろう。手当たり次第に行動を起こしても、肉体の準備のない女性は応じないだろうし、そもそも初潮前に性交を行うと子宮頸癌などの罹患が高率になる。そこで、男性が、初潮前の女性に何の迷惑もかけずに適齢期の女性を懐胎させる方法は、ただ一つ。「初潮を終えた適齢期の女性だけをピンポイントで感知する能力」を持つことである。そして、今突如として女性の肉体が反旗を翻し、初潮年齢を上げたとして、現実にこの感知が達成できるのは、対女性共感覚を持つ男性だということになる。要するに、過去の我々男性においては、対女性共感覚が珍しいものであったはずがない。

過去の男性に、私のような対女性共感覚がおしなべてあったことは、もはやこのように間接的に、周りくどい方法でしか証明できない。ただし、どこをどう迂回しても、「あっただろう」という結論だけは歪まないのも、大変皮肉なことだと思う。

つまり、もし今後、世界大戦なり大災害なりの結末として、人類が原始的生活に前戻らざるを得ない状況が起こったとすれば、対女性共感覚者男性にとっては、皮肉にも自分の知覚能力を披露する機会が巡って来るのだ。しかし、これはパラドックスである。どうして、戦争がない状況で、これだけ人口が過密で（メスが何キロメートルも遠くにいる、などということがない人類のオスの一員で）、対女性共感覚がなくとも困らない状況にある（同種の動物のメス（＝女性）の初潮年齢が極度に低下している）にもかかわらず、今でも私は対女性共感覚を有して生きているのだろうか。自分自身の意志によるのか、この共感覚に伴う徹底した「美的感覚」「感動」を捨てたくないという執念によるのか・・・。

いつの時代もそうかもしれないが、「実感」「体験」は、当事者にとつては、あらゆる「理論」「論理」に対して常に上位に立っている。対女性共感覚だけでなく、共感覚全てについて言えることである。共感覚者にとっては「本当に文字や音に色が見える」のに、理論的に「そんな感覚は人類には存在しない」という結論が導き出された

としたら、それは理論のほうがかで大きな過ちを犯しているのである。

それと同じで、我々が最も避けなければならないのは、「過去の男性の世界知覚能力は、今の我々とそんなに違わない」という視点であるように思う。共感覚研究の難しさとは、そこにある。共感覚者が言っている実感、例えば「私の共感覚は物心付いたときからあった」「胎児期から共感覚を自覚していました」という主張のほう为正しいのであるから、最初から結論ありきである。

それと同じくらい、「共感覚は我々の脳が生み出している」というのは、事実ではないかもしれないのである。胎児期は、脳の形成途中である。これに対応し得る正しい科学的態度とは、「共感覚は、脳が生み出しているとは限らない」という態度であって、にもかかわらず、現在の共感覚研究が「脳の観測」に頼っているということは、そこに多分に研究者の五感による非科学的信念が含まれていることを物語るように思う。

今のところ、共感覚研究に携わっている専門家・研究者で、私のような視点を持つ人を知らない。ただし、それは「体験者」と「研究者」の違いなのかもしれない。「科学」というものは、常に他者に対する観測結果を記述するものであって、「私は女性の排卵を感知できます」という男性が自分で自分のその能力を記述するというのは、

ただそのことだけで、どうしても「科学的な価値」がそがれてしまうからである。それは宿命であるが、なぜか自分の悪い宿命ではない。どんなに頑張っても、それはエッセイか文学と見なされるかもしれない。ならば、いっそのこと、そのエッセイ、その文学を書き続けようというつもりである。

ましてや、「私の脳の全体を物理的に破壊すること」と「女性の排卵・月経感知ができなくなること」とが同じことを意味するかどうか、それも疑ってみたいと私は思う。昨今の日本の脳科学ブーム、スピリチュアル・ブームに対して、根本的に私が感じる不安や危険性といったものは、そこにある。

先日の講演では、表向きは共感覚の具体例を多く挙げたけれども、その深いところで私が最も言いたかったことは、このようなことであった。それが少しでも伝わってくれば、嬉しく思う。

第一部 京都講演 感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈こ  
とば〉く共感覚、自閉症、幼児の体験世界く

第一章 講演します

二〇一一年一月三日 起筆、擱筆、公開

一般参加可能ですので、どうぞご参加下さい。日本質的心理学会の研究会です。

<http://www.jaqp.jp/>

（引用始め）

◆感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉と共感覚、自閉症、幼児の体験世界

人間は〈ことば〉の世界を生きている―これが現在の質的心理学の「常識」であり、多くの分析手法もこの前提に基づいている。しかし、元来、人間の〈ことば〉は〈からだ〉の働きに基礎を持つものとして発展してきたものである。また、どんなに〈ことば〉の世界が発展したとしても、人は最終的にはこの〈からだ〉でもって生きるほかない。そうした事実を忘れ、〈ことば〉の世界にのみ研究者の目が向くとすれば、それは人間の生に迫ろうとする質的心理学にとって大きな危機ではなからうか。

当企画では、〈からだ〉と〈ことば〉がいかなる関係にあるのかを改めて問い直し、人間の生を捉えるためにどういった視点が重要なのかを、三人のパネリストの講演を手掛かりにして考えていく。☺  
人に共通するのは、〈からだ〉と〈ことば〉が特異（非定型的）な結びつき方をしているように見える人々（共感覚、自閉症、幼児など）

の独特の感覚世界を参照しつつ、思索を進めていることである。

〈からだ〉のいかなる働きから〈ことば〉が生まれ、いかにして我々の世界を作り出していくのか、さらにはそのことが〈からだ〉にいかなる作用を及ぼすものなのか―感覚の「異文化」との接触を通して、そうした問題への糸口を模索していく。

【日時】二〇一一年三月五日（土） 13時～16時30分（予定）

【会場】キャンパスプラザ京都 4F第4講義室

<http://www.consortium.or.jp/>

【内容】

△登壇者▽

・岩崎純一

文字や数字に色を感じる、音・味・匂いに色や形を感じる、風景に音を聴くなど、さまざまな共感覚を持つ。著書に『音に色が見える世界』（PHP新書）など。

・西村多寿子

翻訳者兼ライター。「身体的側面から見た言語習得」の探究をライフワークの一つとし、多方面で活躍。書評、論文等多数。

・村上靖彦・・大阪大学大学院人間科学研究科。専門は現象学、精神病理学。

精神分析学にも精通。著書に『自閉症の現象学』（勁草書房）など。

△指定討論者▽

・浜田寿美男

幼児、自閉症、供述分析などの研究を通して〈からだ〉と〈ことば〉の関連を探究。『私と他者と語りの世界』（ミネルヴァ書房）など著書多数。

△司会▽

・大倉得史（京都大学大学院人間・環境学研究科）

【参加費】学会員 無料

非会員 500円

【主催】日本質的心理学会研究交流委員会、京都大学人間・環境学研究科質的心理学研究會

【申込方法】上記学会のサイトをご覧ください。  
(引用終わり)

第二章 感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉

共感覚、自閉症、幼児の体験世界、共感覚とは何か

配布テキスト

二〇一一年一月八日 起筆

二〇一一年三月二日 搁筆

二〇一一年三月五日 配布

二〇一二年四月九日 他の講義でも配布開始

感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉～共感覚、自閉症、幼児の体験世界～

### 共感覚とは何か

岩崎純一

日本質的心理学会

2011年3月5日（土）13:00～16:30 キャンパスプラザ京都 4F 第4講義室

#### ◆漢字の「感じ」

AとBを見た「感じ」に区別がない。右のように、共感覚で多くの文字を読んでいる。

A 京都 A 京都  
B 显申考 B 显申考

#### ◆共感覚(Synaesthesia) ギリシャ語 =syn（共に）+aesthesia（感覚）

文字に色が見える＝色字

音に色が見える＝色聴（絶対音感者が多く持つ共感覚として知られる）

風景に音が聞こえる＝音視（色聴よりはまれ）

味に色が見える

匂いに色が見える

味に形がある

匂いに形がある

触感に色がある

人や物を見ただけで触れることができる＝ミラータッチ共感覚

など

■従来の共感覚への見方＝wild, lunatic など否定的、恐怖・不安・差別の対象

● 19世紀西洋の一般の人々は共感覚者を「野蛮で狂気」と見ていた。

Galton, Francis, Inquiries into Human Faculty and its Development. 1883. London:

Dent, 1911, 111.

●「あなたが研究しているのは、精神遅滞者で脳ミソが無茶苦茶な人たちだ」と同僚から言われた。

Cytowic, Richard E, *The Man Who Tasted Shapes*. 1993. Cambridge, Mass.: Bradford, 2003. s, 34

●「共感覚をほめることは、人間の意識から牡蠣（カキ）の意識に戻ることを進歩と呼ぶようなものである」

Nordau, Max Simon, *Degeneration: Translated from the Second Edition of the German Work*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1993, 142.

■現在の共感覚研究者の見方＝肯定的、実在の感覚と認める、個性、長所  
いわば「乳幼児総共感覚者説」

●「少なくとも乳児は皆共感覚者であり、脳の機能分化が無い」

Maurer, Daphne and Maurer, Charles, *The World of the Newborn*, New York: Basic Books, 1988

●「多くの方は大人になると共感覚を失うが、2000人に1人の割合で持ち続ける人がいる」

Marks, Lawrence E, *Synesthesia: The Lucky People with Mixed-up Senses*, *Psychology Today* 9, 1975

●「乳幼児は五感の強弱だけを判断している。あるいは、少なくとも視覚と聴覚の区別は無い」

Lewkowicz, David and Turkewitz, Gerald, *Intersensory Interaction in Newborns: Modification of Visual Preferences Following Exposure to Sound*, *Child Development* 52, 1981

やまとことば (ほぼ訓読みのこと)	現代語 (ほぼ音読みのこと)
「色が身にしみる」(和歌)	「色彩が身体に浸透する」
「味を見る」	「美味を目撃する」
「音色を味わう」	「音波の色彩を賞味する」
「香りを聞く」(香道)	「香気を聞知する」
「柔らかい音」	「柔軟な疎密波」
「重々しい色」	「重厚な可視光線」
＝幼児期・古代日本・先住民社会では共感覚が生活になじんでいた(いる)のではないか	“hear color(s)” “see sound(s)” ＝wild (野蛮)、lunatic (狂気) と言われた要因

岩崎純一 プロフィール

1982年生まれ。共感覚・絶対音感などの特殊な感覚を持って生活する。財団法人勤務。著述家。東京大学教養学部中退。自らの持つ感覚をフリーで研究。共感覚者など同じ感覚能力を持つ人々との交流、鬱・対人恐怖症・自閉症・アスペルガー症候群の人々との交流、言語障害者と会話するための日本古語を元にした新文法言語の考案などをおこなっている。

ウェブサイト：<http://www.iwasaki-j.sakura.ne.jp/>

(2018年7月8日に追記：当時のサイト)

第三章

感覚の「異文化」から見る〈からだ〉と〈ことば〉  
共感覚、自閉症、幼児の体験世界  
共感覚とは何か  
スクリーン映写テキスト

二〇一一年一月八日 起筆

二〇一一年三月二日 擱筆

二〇一一年三月五日 映写

二〇一二年四月九日 他の講義でも映写開始

別添資料を見よ。

第四章  $\wedge$ からだ $\vee$ と $\wedge$ ことば $\vee$

二〇一一年三月七日 起筆、擱筆、公開

A 京都  
B 显申考

右の二図は、五日の京都での講演で、「僕にはAとBの認識上の区別があまりなく、Aが意味を持った記号だとは即座に感じられない」ことを示すのに使ったもの。（実際は、次の図のように共感覚色で読んでいるので、問題ない。）

# A 京都 B 显考

今回のテーマは「^からだVと^ことばV」で、僕は「共感覚」を通じて、このテーマについて語った。

僕の場合、共感覚当事者として語るか、共感覚研究者として語るか、どちらのスタンスに立って話そうかといつも迷うのだが（と言っても、実際は混ざってしまうが）、今回は当事者として、自分が見



講演の様様  
写真ご提供者…大倉得史氏（司会、京都大学大学院人間・環境学  
研究科准教授）

ている共感覚世界（カラー図）を徹底してスライドで例示するとい  
うスタンスをとってみた。  
他の登壇者の方々のおかげもあって、バラバラした僕の話も少し  
はまとまったかなと思う。  
五月末あたりに出る僕の著書は、「人に色が見える共感覚」を「自  
己と他者との関係」からも語っている点で、ある意味では哲学書の  
ようなもので、浜田先生や村上先生のお話とも深い関連が出来ること  
になりそうだ。

第二部 ヒトのからだ、こころ、ことば 共感覚を通して

女性施設における講義・講話・教育活動用資料

二〇一一年三月九日 起筆

二〇一一年三月十六日 摺筆

二〇一一年三月十八日 配布・映写開始

別添資料を見よ。

第三部 今西錦司

二〇一一年六月十九日 起筆、摺筆、公開

■おすすめ著作

『生物の世界』 『人間以前の社会』 『自然学の提唱』 『自然学の展開』 『進化とはなにか』 『ダーウィン論』 『主体性の進化論』

西洋白人の手による霊長類社会学に対する日本発のそれを考える上で、また私が自らの共感覚観や解離性障害観を構築する上で、今西錦司という人は避けて通れなかった。私は今西理論に手放して賛同するわけではないが、私が「共感覚の原帰属性」と言うときの「原

帰属性」とは、今西理論の「プロトアイデンティティ（原帰属性）」の（条件付きでの）借用である。

「共感覚は幼児期には皆にある」という説は、共感覚研究者の一派にとつてはもはやありふれたものであるが、人間にとつてのこの先験を再発見するのに、なぜここまで時間がかかったのだろうかと思議にも思う。

私は、私の持つ対女性共感覚（女性の性周期情報を共感覚で捕捉する力）も多くの男児は持っていることを、そのお母さん方とお会いしてお話を伺うなど、フィールドワーク的に探究してきたつもりだが、ともかく、「乳幼児総共感覚者説」が今西氏のプロトアイデンティティ説と深いかかわりがあると見て、今西学を読んできたのである。

「プロトアイデンティティ」とは、「自らが属する種に対して先験的に有している帰属性」のことである。あらゆる生物が同種の個体を認め合うことができるのはなぜかを追究した結果、この能力を「先験的に」持っている今西は分析したのである。

「共感覚は幼児期には皆ある」という脳神経学上の事実は、言い換えると、「共感覚は人類のプロトアイデンティティである」となるだろう。しかし、これでは不十分であるというのが私の共感覚観でもある。共感覚はあらゆる生物のプロトアイデンティティであるだろう。

ただし、さらにそれが「無生物・自然物のプロトアイデンティティでもある」という仮説に持つて行く時には、唯識論を用いて考え

るしかないと思っっている。「音に色が見える」共感覚は極めて認知・認識の意味を帯び、「女性の排卵が色で見える」共感覚は極めて感覚・知覚の意味を帯び、最後に「私は石ころであると感じる」共感覚は極めて「物性≡仏性」的意味を帯びるからである。

コウモリどうして次のような会話がおこなわれたなら、我々は腹を抱えて笑うしかない。「君は本当に超音波を知覚しているのか？」  
「え、僕たちは同じコウモリだろう？ それを知覚せずして、どうして僕たちがコウモリ友だちだと理解できたのかい？」

だが、今や全世界の共感覚研究者が共感覚者に対しておこなっている研究とは、すなわちこれである。「君は本当に音に色が見えているのか？」

あらゆる生物のうちで人間だけが、前言語的なプロトアイデンティティを失ってきたのかもしれない。しかし、このプロトアイデンティティの正体は何であるのか、今西氏はついに語らなかつた。一方で、世の生理学者たちの一派は、「共感覚は幼児期には皆ある」と主張するようになった。

これらの学説がいつの日か折衷されて生じる学説こそ、私が思い描いている「共感覚原帰属性仮説」のようなものであってほしいと思ってしまう。すなわち、「人間以外の生物のプロトアイデンティティは、仏性レベルでの共感覚によって生じている」ということが言えるのではないだろうか。

#### 第四部 梅棹忠夫

二〇一一年六月二十日 起筆、擱筆、公開

##### ■おすすめ著作

『文明の生態史観』 『日本人の知恵』 『情報産業論』 『情報の文明学』 『地球時代の日本人』 『女と文明』

梅棹忠夫の思想体系から得た最初の印象は、和辻風土論のトリッキークーナ延長論というもので、やはり西洋と東洋の差異とは何かを今でも探究したい私としては、大乾燥地帯をど真ん中に挟む、いわば「第一地域分断論」や「第二地域挟み打ち論」には、無条件に首肯できるわけではない。

また、梅棹理論に決定的に欠けているのは、言語学の統語論的視点であるとも思う。大乾燥地帯南部のベンガル語は、元は英語と同源の言語から袂を分かつた言語である。逆に、トルコ語の統語論的構造を見れば、ウラル語族と共に遊牧騎馬民族の名残りをとどめる非印欧語族であることが分かる。さらに、ギリシア哲学は東に行かずに西に、仏教は西に行かずに東に、それぞれ伝播したのである。梅棹理論のトリッキークーナ性質は、色々な側面から説明できると思う。さらに、漢字廃止論など、国語としての日本語観においても、あまりにユニークな思想が多いと感じられる。

しかし、梅棹理論に対する私なりの評価は、東洋諸外国に対する

日本の特徴を明確にした点である。もつとも、私の場合は、共感覚という感覚を持っており、同じことを共感覚や解離性障害を持つ日本人の言語障害を見て明確に意識した。

例えば、日本（大和）民族の文化依存症候群であると言ってよいような、解離性障害の諸症状があつて、これは朝鮮民族（韓国・北朝鮮を含む）には起こっていないようなのである。大乾燥地帯において超大専制帝国を築いた漢民族と陸続きの朝鮮民族においては、個々人の性格を考慮せずに国民・民族全体の傾向として日本民族と比較する限り、その排他精神（昨今の反日運動などに見られる精神）が、日本民族よりも穏やかならぬもの、日本民族よりも漢民族に近い性質のものであつたとしても、善し悪しというよりはその民族の性質であつて、何ら不思議はないものと私は考える。

### 第五部 三木成夫

二〇一一年六月二十日 起筆、擱筆、公開

#### ■おすすめ著作

『胎児の世界―人類の生命記憶』 『内臓のはたらきと子どもものところ』 『生命形態の自然誌 第一巻 解剖学論集』 『海・呼吸・古代形象―生命記憶と回想』 『生命形態学序説―根原形象とメタモルフォーゼ』

三木成夫の『生命形態学序説』の一節である。

（引用始め）

「一般に下等動物は、自分のほんの身の回りのできごとだけを、しかし文字どおり、“全身でもって”受け取っていた（近接感覚・触覚と味覚）。すなわちそのような刺激に応ずる感覚細胞がからだの表面いたるところにちらばっていたのである。

ところが高等な動物になるとしだいに遠くのできごとにも感ずるようになり（遠隔感覚・嗅覚、聴覚、視覚）、ついに人間では何億光年の宇宙のかなたまでも見ることができるようになった。しかもこれらの感覚細胞は同じものが1カ所に、それもからだの前端に集まるのであつて（鼻、耳、眼）――ここには栄養の入り口も開いている――すなわち、このような植物性過程と動物性過程の入り口が集まったいわば“からだの窓口”をわれわれは顔とよんでいる。ヒトの胎児の発生をながめると脊椎動物の顔の歴史のいわば再現がみられる」

（引用終わり）

私は常々、共感覚を持っている自分のことを「人の高等知能を持ったオスザルである」と言っている。大学の講義でも学生に向けて同じことを言ってみている。私が言いたいことは、三木成夫の生命観にだいたい同じだ。

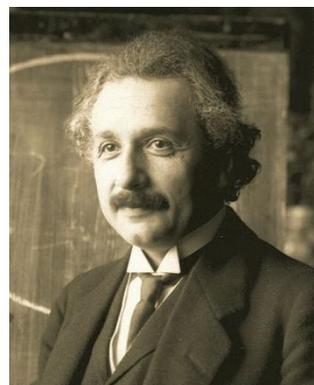
下等感覚に浸っていることでもなければ、高等知能でもって下等感覚を見下すのでもなく、下等感覚を失わない体をもって高等に生きる事が、これからの人類のやるべき仕事であると思う。あるいは、下等感覚は、もはや一つの「高級品」であるのかもしれない。その「下等な高級品」を忘れた人間に、真に温かい「感覚」が生じることではないのだろうか。

三木成夫のような深遠な生命観を持って動植物の研究をおこなっている人は、今の日本にどれくらいいるだろうか。私の生命観も、三木成夫のそれに比べれば、まだまだ不十分であると感ずる。

## 第六部 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心についての一考

### 第一章 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心についての一考（その一）

二〇一一年十月三日 起筆、擱筆、公開



■質量のある素粒子の光速超え

九月二十三日に、ニュートリノ振動検証プロジェクト OPERA のチームが、素粒子ニュートリノが光速を超える速さで移動したことが実験で確認されたと発表した。（二〇一二年七月十日追記：実験方法に不備があったことから、二〇一二年六月八日に実験結果を正式に撤回した。）

研究チームは、測定誤差の可能性を排除して一万五千回の実験を行い、ほぼ同様の結果となったことを強調しており、もし結果が本当ならアインシュタインの特殊相対性理論と齟齬が出るということで、話題になっている。（理論上は、ニュートリノが未来から現在にやって来ることがあり得ることになるから。）

（日本語プレスリリース）

<http://flab.phys.nagoya-u.ac.jp/2011/wp-content/uploads/2011/09/>

PressReleaseJPlast20110923.pdf

私が思うに、もし本当だとしても、今後生まれる新理論の相対性理論に対する関係は、相対性理論のニュートン力学に対する関係に同じだろう。

つまり、相対性理論は極値においてニュートン力学に近似（ニュートン力学を内包）するようには、極値において相対性理論に近似（相対性理論を内包）する新理論が生まれるということであって、普通はこれを「相対性理論が間違っていた」という言い方はしないし、（アインシュタインをはじめ様々な科学者たちの意に反して）原爆や原発を生み出した「張本人」であるこの理論が簡単に崩壊することはないと考えられる。

■強度共感覚者や重度自閉症者の先験性は科学的先見性

私は、根っからの人文系人間である上に、自分の中に「共感覚」や「解離感」、「天体や素粒子のふるまいを頭の中で立体的に描く幼少期からの遊び」など、いわば特異な「宇宙」があるものだから、現代物理学（相対性理論や量子力学）についても、まずは自分の身体や仏教哲学（禅・中観・唯識）から入ることの方に面白味を感じる。

ただし、私が言っているのは、特定の宗教・宗派としてのそれら

ではなく、前宗教的な仏教哲学としての「仏法解釈」のことで、いわば、釈迦本人、龍樹本人の人間性から出た「物の考え方・世界観」とでも言うべきものを指している。私自身は特定の宗教の信者ではなく、自分のことを「日本的なアニミズムの持ち主、自然信仰者」とだけ思っている。

そこで話題にしたいのは、勝手な発想ながら、相対性理論の祖アインシュタインや量子力学の祖ハイゼンベルクやボーアといった人たちには、自閉症とまではいかなくとも、共感覚・サヴァン症候群・アスペルガー症候群・離人症などと言えるような感覚や感性があったらうということである。

量子力学などの用語（波動方程式など）をあえて使わずに、私のなけなしの日本語能力で大雑把に説明することが可能かどうかは分からないが、以下に、物理学・自閉症論・仏教哲学を内包する私の世界観を説明してみる。

突然だが私は、強度の「共感覚」や重度の「自閉症」というのは、「現代人の一般的五感」プラス「相対性理論・量子力学」のようなはたらきを持っていると考えている。

重度自閉症者たちの「身体」は、両理論を基礎として主に現代物理学者が「論理的思惟」によってやっとの思いで手に入れてきた量子脳理論や素粒子物理学の「物理理論」の役割を元より備えている、すなわち、重度自閉症者たちにおいては「科学的先見性」は「非科学的先験性」に同一である、という考え方である。

もっと分かりやすく言うと、全ての人間の子どもや動物というの

は、元より相対性理論的・量子力学的境地を先験的・前数式的に持つて生まれるのだが、便利な科学技術を身体の外に有する近現代人の脳と体だけが「無くとも生活に困らない感覚（共感覚など）」を失っていき、成人の頃には決定論や運動方程式を基礎とするニュートン力学しか「自然だと感じられない」脳と体が形成されるのではないかとという仮説である。

#### ■現代人の五感のニュートン力学性

いわゆる「現代人の健常者」の持つ五感・感覚というものは、古典物理学、その中でもニュートン力学の範囲内ではか世界を「見て」いないことは確かだと思う。ここでの「見て」とは、量子力学的な「観測」ではなく、ただの五感的な「目視」「目撃」「聴解」などのことである。それを超えた量子力学などの知的世界は、「思考」「思惟」によって到達するものだと考えられている。

（ニュートン力学は決定論や運動方程式に特徴付けられ、量子力学は確率解釈や波動方程式に特徴付けられる。）

例えば、道の両側から車どうしが走って来てぶつかった時、警察はわざわざ「自分の目には、自動車及び車内の運転手の人体を構成する素粒子が進行方向に収縮し、素粒子の時間が遅れたと観測されたため、事故の発生時刻及び運転手の年齢を特定できない」などとは考えない。

つまり、近現代の「常識」や「社会通念」や「法律」、さらに「自己と他者との関係」などの概念は、近現代人の五感とそれに基づく学力・想像力が実は「ニュートン力学程度でしかない」ことによって、うまく機能している。

量子力学的には「事故車両を構成する素粒子にはアリバイがあり得る」のに、ここでは「事故車両は特定できる」ということの方が「正しい」のだから、ニュートン力学は「現代の先進国民の分裂した五感」において「正しい」、とするのが物理学の在るべき「正統」な姿である、と私も考える。

同じく、ニュートリノが超光速であったとしても、相対性理論は「現代の先進国の物理学者の分裂した五感による知覚と思惟」において「正しい」とするのが「正しい」、ということに変わりはない、とも考える。冒頭で書いたのは、そういうことのものである。

つまり、「相対性理論が正しいから原爆や原発を作ることができた」のではなく、「原爆や原発を作ることができたから相対性理論は正しい」とする世界観は、後に述べる仏教的境地においてとても重要な世界観だと思う。

我々現代日本人の五感とそれに基づく学力・想像力が基本的には「ニュートン力学でしかない」という例は、いくらでも挙げることができる。それは、「我々の感覚・意識は、本当はニュートリノを含めた素粒子の確率論的・不確定的ふるまいと全く同じふるまいをしているのに、それが（物理学者から教えられない限り）分からない」という点に如実に現れる。

例えば、被験者の脳の視覚野を刺激して視界の真ん中に穴が空くようにしておき、穴の周りの背景部分に「青、緑、赤」の順に色のカードを見せると、緑を見たと同時に穴の部分に赤が見えることがある。いわば、緑を見せた段階で赤という未来が見えたことになる。

また、右脳の体性感覚野の左足をつかさどる部位を直接刺激し、そのまま今度は右足の皮膚に手で触れると、後者の方が「皮膚、感覚神経、左脳」という順に一定の移動時間を要するはずなのに、意識の上では、左足よりも右足を先に触られたと自覚する。いわば、過去と未来の逆転が起こる。電子などの素粒子のふるまいは、もちろんそれら素粒子が構成する脳や神経系のふるまいを形作るわけである。

これらは、いずれもベンジャミン・リベットをはじめ自由意志研究や量子脳理論学・素粒子物理学の分野で得られた知見である。

ところが、現代の我々は、「普通に考えてそんなことはあり得ない」とか、「あったとしても信じられない」とか、「あくまでも知識として知った」という「感じ」を受ける。

#### ■自閉症やサヴァン症候群（や私の共感覚）の量子力学性

ところが、そのようなことが「あり得る」ことが「信じられる」「感じ」を最初から持っている「現代人」がいる。例示したようなこと（交通事故や神経系の変化）が起きたときに、それらのあらゆる情

報を知覚してしまうために、重要な情報だけを取り出して他は切り捨てるといふ抽象能力に立脚する現代の社会生活が送れず、パニックを起こす人のことだ。これを我々は「自閉症」や「サヴァン症候群」と呼んでいると私は考えるわけである。

私の共感覚にも、「自閉症」や「サヴァン症候群」と似たような性質を持つものがある。二冊目の拙著で「対女性共感覚」という私の共感覚を紹介した。

私が女性の排卵を共感覚で遠方から感知する「感じ」というものは、ニュートン力学を超えてアプリアリに相対性理論的であり、（相対性理論を含めた広義の）古典物理学を超えてアプリアリに量子論的である。そのような時空観・素粒子観を、私の身体だけを用いて体感できる共感覚の筆頭が、対女性共感覚であるのだと考えている。

実は、この私の自閉症観と同じことをおっしゃっているのが、二冊目の拙著を「動物と感情」などの観点から分析して下さっている松本氏で、以下に一つ、氏による拙著への言及を挙げておく。

#### 「動物と感情」について

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/masson63.html>

この対女性共感覚について、私の神経系や自我のふるまいを波動関数（波動方程式）レベルで考えるとはどういうことかと言うと、「女性の身体から素粒子レベルで排卵情報が発せられた時刻（1）」と「素粒子レベルでの女性の排卵情報が、私の皮膚なり網膜なりに達した

時刻(2)」と「女性の排卵情報が素粒子レベルで私の感覚神経・脳を動かし始めたと思われる時刻(私の脳の電位の発生など)(3)」と「女性の排卵情報を素粒子レベルで感知したと私の自己意識が自覚した時刻(4)」とを、今回のニュートリノ実験ほどの精密さで測ってみると、(1)(2)(3)(4)の順番になっておらず、(1)よりも(2)、(2)よりも(3)、(3)よりも(4)が早い場合があるということである。

多くの自閉症の男性も、現代人の五感にとって常識的な順番になっていないことの方が自然であると体感される身体を持って生きているだろうし、そしてその体感は、相対論的・量子論的にも全く正しいというわけである。

これは、最終的に「異性とは、いつでも波動関数的・確率論的に立ち現れる他者である」という「東洋的な無我や日本的なはかなさ」を語るのに、絶好のテーマだと私は思っている。この「体感」を、古代日本語で「恋(こひ)」と呼んでいたというのが、私の和歌・古典解釈の態度でもある。

続く。

■ 画像出典

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Einstein1921\\_by\\_F\\_Schmutzer\\_2.jpg](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Einstein1921_by_F_Schmutzer_2.jpg)

第二章 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心についての

一考(その二)

二〇一一年十月七日 起筆、擱筆、公開



■ 「心の理論」

以上、(その一)で書いたことをまとめると、こうなると思う。

いわゆる現代物理学を生み出してきた物理学者たち、例えばインシュタインは、(今の義務教育の算数・数学から始まってニュートン力学までを習得するという)初歩的知識の積み上げの順を追って相対性理論を「発明した」のではなく、相対性理論を「五感で元々知っていた」から「発露できた」のではないか。「発露」のために足りない「言葉」が物理学用語であったというだけではなかるうか。(実際にインシュタインは、初歩の物理学・数学能力に問題があったらしい。)

そして、現代においてアスペルガー症候群・サヴァン症候群などと呼ばれる世界認識様態がインシュタインらにあったと考えれば、それよりもさらに重度の自閉症者・サヴァン症候群者などは、相対性理論のその先(量子力学・不完全性定理など)さえ「体感」として持っていると考えることができないのではないか。

しばしば自閉症者・サヴァン症候群者について、「心の理論」が理解できない人たちだという言葉方をする。以下の「サリーとアン課題」が有名である。

- 一、サリーとアンが部屋で一緒に遊んでいた。
- 二、サリーはボールをカゴ(中が見える)の中に入れて部屋を出ていった。
- 三、サリーがいない間にアンがボールを箱(中が見えない)の中に

移した。

四、サリーが部屋に戻ってきた。

質問・サリーはボールがどこにあると思うか？

現代の定型発達者(健常者)にとって正解は「カゴの中」だが、自閉症者たちの最も一般的な回答では、「分からない」や「ボールは消えた」が多く、次いで「箱」、そして「カゴ」となる。

ところが、少しミクロの世界(例えば、脳神経系のふるまい)になっただけで、健常者として自閉症者を笑っている場合でなくなることは、その一の記事に示した通りである。「緑と赤、どちらを先に見たか?」「同時です」。「まずどちらの足に触れたか?」「右足です」。これら「本当のような嘘」が、現代の「自閉症でない」健常者の「正しい世界認識」とされる。

先に述べたように、現代の健常者は、決定論やニュートンの運動方程式の方がどうしても「五感・体感」として「自然に感じられる」ために、「心の理論」や先の例(色のカード、足への接触)に対してニュートン力学的に理由を与えようとする。

「心の理論」のように、自分たちの五感・意識にとって自明的な「正しさ」については、これが理解できない相手方を「自閉症」と名付けている。一方、先の例のように、自分たちにとって不可解な現象については、自分方に都合のよい解釈を考える。

それが、「経験の繰り上げ(下げ)」や「時間の繰り上げ(下げ)」と言われるものだ。色のカードの例だと、「赤を見てから緑と赤を一

緒に意識に上げた」という解釈が主流である。先に挙げた私の対女性共感覚についても、おそらく「経験と時間の繰り上げ（下げ）説」が適用されることになるだろう。

これらの「表向きは健全な回答」は、「ニュートン力学的・常識的な五感と意識において正しい」だけであって、「量子力学的・自閉症的・共感的な五感と意識においてはそうとは限らない」ことに、もつと目を向けたいと私は考える。

前者の「正しさ」は、例えば、「自己（回答者）」と「他者（サリィ・アン）」が全て別個の物理的実体・独立の素粒子結合体であるという「量子力学的には特殊な事態」を我々現代人の脳のニューロンが仮に幻想し、かつそのことが幻想であることを意識するためのニューロン活動が淘汰され停止していることのみによって、保証されている。

ところが、「ボール」を「素粒子一個」に置き換えてみれば、たちまち自閉症者たちの答えが「名答」となる。自閉症者たちは、いわば本能的に「シュレーディンガーの猫」や「コペンハーゲン解釈」を「心で」議論しているのだと思う。

むしろ、量子力学は、そのようなミクロの世界に適用するのが一般ではあるが、これから述べる禪・中観・唯識では、いかに巨視的・可視的な物理現象であつても、実体的実在を問えない東洋的絶対無の境地があると見る。

現代の定型発達者の五感が「古典力学系」であるのに対して、自閉症者の五感が「量子力学系」であるというのは、さらに詳しく見

ていくと、どういうことを意味するのだろうか。前者は、あらゆる物理現象を絶対時空間内の因果律・決定論で見る習慣が付いている。だから、外界の情報が、我々の感覚神経から脳のニューロン発火、そして意識に達するまでの過程を、「感覚・知覚・認識・認知・思惟・感情」などに分けて段階説をとっているとも言える。

量子力学は完全に「思惟」や「知性」の問題と思われ、「体感」としてはどうしても西洋的・古典的因果律に落とし込まなければ気が済まないという「感じ」が頭にあるのが、現代の定型発達者だと言えるだろう。

#### ■東洋的無我と量子力学

無意識のうちにニュートン力学的五感に合わせて世界をとらえようとすることの「感じ」を人間が覚えるようになったのは、人間史上において近現代にすぎない、しかも西洋人から順にそのようになった、という私の考えは、ずっと一貫しているつもりである。

ある意味で、「古典力学」の「古典」という用語は正しくないのではないか。「古典力学」は、有史以降の人間の脳が自閉症的・サブアンの共感覚を失った結果として得た、後天的に限局された「物事の見方」であると私は考える。

そう考える私としては、むしろ、「なぜ人間の感覚や意識は、外界の過去や未来を正しく見ていないのか」ではなく、「なぜ人間の感覚

や意識は、過去や未来という概念を生み出したのか」という問いの方が重要な問題だと感じられる。あるいは、後者の問いしか残らないとも言える。こういうところに、一種の禅的・仏教的な観点から自閉症者の世界認識を考える意義を感じる。

実際のところ、自閉症者の世界認識では、およそ先のような因果律というものが崩れている。「崩れる」とは、「この世界・宇宙の物理現象を、西洋的自我ではなく、東洋的無我として達観する」ことだと私は考える。

もっとも、そう言うからには、「世界をありのままに認識する」という全人類に普遍的であるはずの概念がなぜ「自閉症的である」ことになるのか、また「自閉症的である」という無国籍的な概念がなぜ「東洋的である」ことになるのか、また「東洋的である」ことがなぜ「世界をありのままに認識する」ことになるのか、これが論理的に説明できなければならぬと思う。そして、この「論理」に当たるものが唯識思想であろうという考えに基づいて、私は唯識思想を見ているつもりである。（この説明については、その三の記事で試みた。）

禅・中観・唯識思想を一通り学んだ仏教愛好家が皆そういう境地や意見になるかどうかは、私は詳しく知らないのだけれども、少なくとも私としては、「近現代人は相対性理論・量子力学・不確定性原理・不完全性定理への先験的な理解を系統発生・個体発生過程のどこかで切り落としてきた」と考えており、「現在はそれらを西洋的な脳機構によって奪還しようとして試みている時代にすぎない」と考えて

いる。

ところが、ここからが重要で、自閉症や共感覚や自由意志や素粒子を研究している一般の量子脳理論学者や素粒子物理学者が普通はそのような考え方をとっていないことには、留意する必要がある。

「相対性理論的・量子力学的現象は、自然界や我々の身体・脳神経系で起こってはいるが、古代人の五感が知らなかったのはもちろん、現代人の脳にも理論化・数式化して初めて認識されたことで、元々人間の感覚能力を超えた真実を解明するのが物理学や数学だ」と普通は考えるようである。

換言すると、人類が存在せずとも、この宇宙・この世の中には素粒子という「状態」（量子の粒子性と波動性という二重状態）が成立すると考える。人類が存在せずとも、時空は相対性理論や量子論の通りに変容すると考えるようである。

むろん、いわゆる「科学（自然科学）」自体の推進力となっているのがこのような考え方であることは、確かだと思う。本当はアインシュタインも、そういう世界観（因果律的決定論）の持ち主であり、そのことがボーアとの論争に関係していることは、よく知られている。

この点、ボーアは少し違って、量子力学と東洋思想とが渾然一体となった世界観を持っており、素粒子の姿を達観するには「仏陀・老子などの東洋思想家が昔に直面した認識論の問題に立ち返らなければならぬ」などと述べており、実際にこの世界観がアインシュタインの理論の欠陥を言い当ててきたまでの正しい道筋となったから、

興味深い。

その一で挙げたニュートリノの件に限らず、私が相対性理論と量子力学、また「場の量子論」と「超ひも理論」、あるいは私自身の共感覚・対女性共感覚などを考える時に、必ず立ち返るところがあり、その一つが、久松真一の『東洋的無』の一節で、そのまま引用しておく。

「私が東洋的無と称しますものは、限定をも矛盾をも絶する此の現存者であります。而も是は私自身と別にあるものではないのであります。若しも別なものでありますならば、それは最早現存者ではないのであります。併し、かかる私は既に私とも言へぬ私であります。無我とは斯かる私に外ならぬと思ひます。汝と我とを区別する立場に於ては東洋的無我は成立たないのであります。東洋に於ける無我は、有の立場の否定に於て甫（はじ）めて成立つものであります。通常の愛としての無我は尚有の立場を出でないものであります。東洋的無我は愛をも絶するものと言はなければなりません」

この東洋的絶対無の境地、そして（私がこれと渾然一体であると見なしている）自閉症的・サヴァン症候群的境地というものは、いわゆる「大統一理論」の構築にとつても欠かせない世界解釈となつていくのではないかとさえ思う。

もしかすると、未来の物理学や数学の主流は、言語障害ギリギリの自閉症者やサヴァン症候群者や統合失調症者が担っているかもし

れない。あるいは、そうであつてほしい。私はそう思っている。

実際に二十世紀には、（少なくとも私から見ると）軽度のアスペルガー・サヴァン症候群は持つていと見られるアインシュタインやペレルマンなどが登場したから、二十一世紀の物理学と数学の発展は、より一層「東洋的・自閉症的無我の懐古」と渾然一体化するかもしれないと私は思う。

湯川秀樹も自らの理論構築に禅哲学を用いた形跡が多々あるけれども、日本人数学者のうち私が最も好きな岡潔と仏教哲学との関連についての私見を、次に書きたい。そして、最後には、「愛をも絶する」境地としての「東洋的無我」とはいかなるものかについての私見も述べてみたい。

続く。

### 第三章 自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心についての

#### 一考（その三）

二〇一一年十月十二日 起筆、攔筆、公開

続き。

■自閉症者の世界認識

さて、これまで、古典物理学・ニュートン力学というものが内包する「因果律的決定論」のいわば「人類史上における特殊性」について、自閉症・サヴァン症候群診断に多用される「心の理論」などを例に述べてきた。

そして、このような決定論がなぜ生じたかを分析する際に、「我々人間自身にそのような決定論を正当であると感ぜさせるような五感様態を我々自身が有するようになったため」であるとするのが私の見方であることも書いてみた。

自閉症者たちの世界観は、一見すると確かに不可解である。「心の理論」問題にはうまく答えられない。ところが、先の例（色のカード、足への接触）のように、健常者が解釈をこじつけるところでは、かえって「緑を見たのは過去でも現在でもある」などと、「ありのままを正しく」答えることがある。

あるいは、自閉症者は「時間と空間の区別が分からない」と訴えることもある。ところが、時間と空間が「同一概念の別称化」にすぎないという「物理学的事実」を体感していたのは、自閉症的傾向を持っていたであろう物理学者アインシュタインその人であった。

先の私の対女性共感覚も、例えば（3）（1）（4）（2）などという順序で私に体感されることがある点などを見れば、まさに「自閉症的世界知覚」であると言えそうだ。これもまた、相対性理論的・量子力学的に（そればかりか科学的全般に）「正しい」可能性を秘め

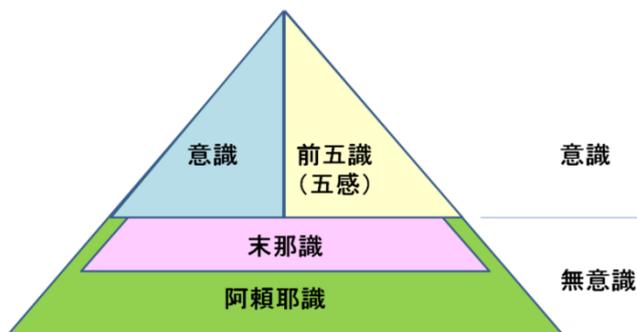
ていると私は考えている。

■岡潔の言う「浅い心」と「深い心」

さて、久松真一が『東洋的無』において述べた「愛をも絶する」境地としての「東洋的無我」というものに、（自閉症的傾向を持つていたであろう）日本人の物理学者や数学者がいかにして達してきたのかについて、私が最も好きな数学者である岡潔を例に述べてみたい。

今の私の人生二十九年間の仏教観は、『中論』や『成唯識論』が基軸であり、かつ「唯識」を「中観」のレトリック、「禪」を「中観」の実践と考えているが、どうしてそうなるか、その詳細は省きたい。

ともかく、仏教哲学（ここでは、私なりに、主に禪・中観・唯識思想を指す）が最初から一貫してニュートン力学的な因果律的決定論（あるいは、アインシュタインでさえ陥ったそれ）を退けている点、自閉症者やサヴァン症候群者にとって親和的にはたらくのではないか、という私の考えを書いてみたい。

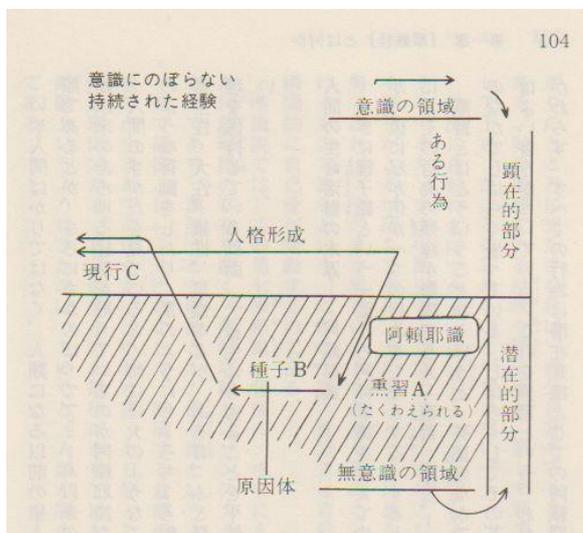


ここに順に、本来的な唯識思想の模式図（最初の二つ。二つ目は、鎌田茂雄著『華嚴の思想』より）、岡潔が晩年に達観したと主張した「西洋と東洋の心の構造の違い」の図、私の作成した「西洋と東洋の心の構造の違い」の図を掲げる。

岡潔は、（私が氏の仏教論や自伝的な書を読む限り）あからさまなアスペルガー・サヴァン症候群的な性格の持ち主であるのはもちろん、散歩中に突然石で地面に数式や言葉を書き始めるなど、奇行の数学者として知られる。

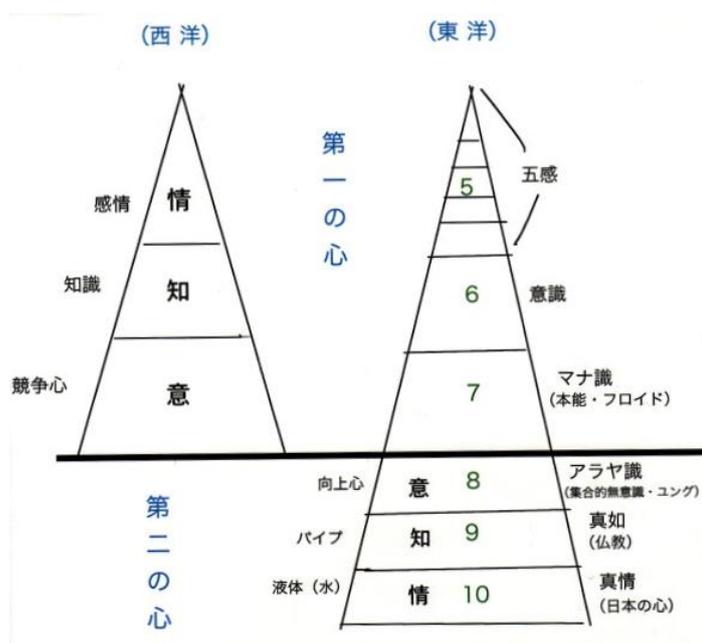
私にとって岡潔の興味深いところは、「自分が数学者になったのは、

著名になるためではない。西洋人のものの考え方を知らためである」とそこかしこで述べている点である。



岡潔によれば、なんと（西洋の学問である数学を自ら究めた結果として、かつ、自分の日本の情緒から出る直観的な結果として）「西洋人の心は浅く、東洋人の心は深い」という結論に至ったという。しかも、西洋人の浅い心を「第一の心」、東洋人の深い心を「第二の心」と名付け、戦後日本人は「第一の心」ばかりを見てきた（日本的な日本人ではない）としている。

さらに興味深いことに、岡潔は、（日本的な）日本の心の構造を数学と直観の両面から調べた結果、日本の心の規定を成す「情（情緒）」



の深さの前には、同じ東洋の思想たる仏教でさえ無力で不十分だと述べて、「真情」としての「日本の心(情)」なるものを図の一番底に置いてある。

岡潔は、「日本の心は人間全般の心」である、すなわち「日本は世界である」と言わなければならない。岡潔によると、近代西洋人には「真情」というものがないらしい。そういうことを自らの数学と日本的情緒から見出したと岡潔は述べている。

■岡潔の唯識思想への私なりの注視点

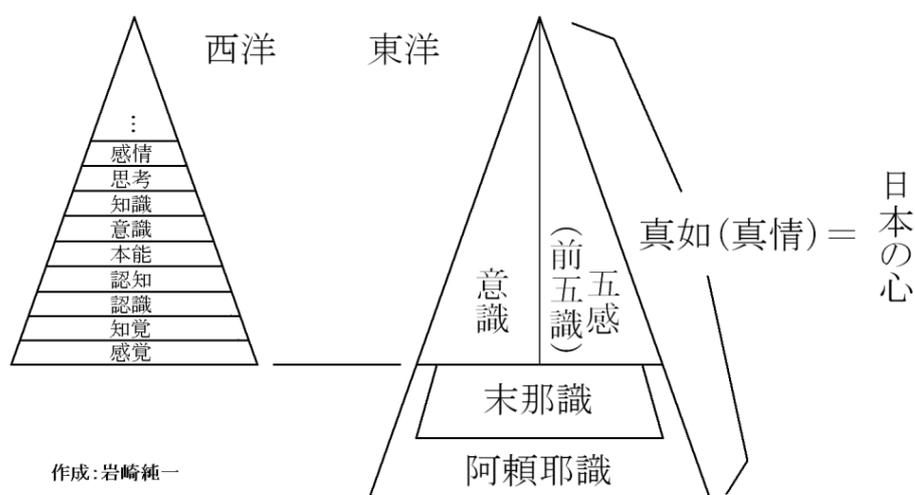
実は私は、岡潔の「脳局在論に基づく因果律としての日本の情緒」の考え方には、かなり異論があると言える。なぜなら、岡潔は、前頭葉を自我意識、側頭葉(今の右脳・左脳に対する岡潔の呼び方)を機械室と呼び、「戦後日本は機械室ばかりを教育し、日本の情緒をないがしろにしてきた」と批判し、日本の情緒というものは前頭葉によって側頭葉をコントロールすることで発生すると見ている。つまり、岡潔は、前頭葉以外の脳部位を前頭葉に対して従属的・補助的に扱っている。

(私が読む限り、岡潔の脳局在論の主張と図とは、あまり合っていない。むしろ、図の方が正しいように思える。)

これに対して私の場合は、「脳や内臓の各部位どうしには、ニュートン力学的な因果関係・上意下達関係は存在しない」と考える。

自我意識・知性の座たる前頭葉とそれ以外の大脳部位、さらには脳とそれ以外の身体部位とに機能差がないと達観すること。すなわち、随意的思惟・意識と不随意的五感・感覚とが同時に脳と身体全体に確率分布しているのみであると知ること。我々が大脳の前頭葉を「観測」した瞬間、そこに自我意識が収束・可視化されるのみであると悟ること。

私の場合は、こういった考え方を、脳で成すまでもなく、内臓で



体感している「情態」を、「日本の心」と言うのだと考えているし、  
 仏教の真如（真理）に向かう考え方だと考えている。「懐かしさ」や  
 「はかなさ」や「恋」などもそこから出てくると考えている。

日本の心

私の場合は、たとえばかなり譲歩して「脳局在論」を認めたとして  
 も、岡潔が「日本の情緒」と呼んだ情感は、前頭葉ではなく、むしろ  
 側頭葉（聴覚そのもの）や頭頂葉（体性感覚そのもの）や視覚・  
 味覚・嗅覚、あるいはそれらの五感と前頭葉の融合感覚（共感覚）  
 こそが、日本の情緒や非西洋的先住民族文化を生み出したと考えて  
 いる。

本来の禅・中観・唯識思想も、岡潔のようなことは言っておらず、  
 私の主張の方に近いと言える。唯識ではどう考えるかと言うと、「五  
 感は意識であり、思惟である」と考える。つまり、「五感（五識）」（知  
 覚）は「意識」や「思惟」の下位プロセスであるという考え方を拒  
 否する。

だから、正しくは、岡潔の図の「五感」と「意識」とは横並びで  
 なければならぬ。これが私の唯識思想分析から見た岡潔の図への  
 注文である。（巷の唯識思想の解説においても、意識を五識の真下に  
 置く図が見受けられるが、これも同じ理由で「悪くはないが不十分」  
 だというのが私見である。）

「日本の心を説明するには仏教（日本にとっては外来の思想）でさ  
 え不十分であると感ぜられる」のは、岡潔も私も同じだが、その理  
 由として、岡潔は、「仏教の識（岡潔による図のマナ識やアラヤ識。  
 意味の解説は後述）よりも縦方向（鉛直方向）に深いのが日本の心  
 であるから」と考えている。

私は、「仏教が説明している同じ心は元々縄文・弥生的自然信仰（ア  
 ニミズム・シャーマニズム）にもあったので、わざわざ仏教用語で

説明すると、悪くはないが野暮になってしまふから」と考えている。

事実、仏教が初めて輸入された時、「日本」という国号も概念もまだなく、「二つのヤマト文化を共有する民族共同体」という意識を持つ人々のいた地理的範囲は今の日本の国土の半分以下であった上に、唯識思想が法相宗（南都六宗の一つ）の教義として日本に広まるのはさらに後世であるなど、唯識思想と岡潔の言う「日本の心」とは、元より歴史的に別々の動きをしているのだから、唯識思想の図の中に一要素として「日本の心」を描き込む岡潔の行為には、かなり無理な奇抜性があるだろう。

さらに私は、岡潔のように「西洋人は東洋人・日本人よりも心が浅い」という趣旨の主張をする東洋人・日本人有識者を見る際、その有識者が「今の」や「昔の」といった修飾語句をきちんと用いているかどうかを分析する態度を忘れないように留意している。

どういふことかと言うと、「今の日本人は、昔以上に価値観が西洋人と大差なくなっている」とか、「岡潔の言う深い心を西洋人が持っていた時代も昔はあった」といふ言い方をするだけで、随分と知的で冷静な（それこそ科学的な）目線でいられると感ずるからである。

#### ■岡潔の達観

しかし、ここで強調したいのは、岡潔のそんな些細な世界史・仏教史上の知識ミスではなく、岡潔が気づいた、洋の東西での「心の

構造要素の積み上げ方」の違いである。数学という西洋人のものと考え方を知り尽くしたこの日本人が、数学と仏教の両方を人生をかけて精査した結果、「西洋の心は浅く、東洋の心は深く、しかも日本の心は仏教でさえ達し得ない深さにある」と言ったのは、それなりに切実で、看過しがたい重みがある。

（こういう発言は、例えば松下幸之助の「水道哲学」を批判して松下幸之助本人に仏教論を持ちかけた中で言うなどしたため、奇行の一種としてもとらえられたようである。）

西洋では、おおまかに分けただけでも「感覚・知覚・認識・認知・思惟・感情」といった段階説をとり、これらを下から順に積み上げ、逆に上から順に欠けていくのを「アスペルガー症候群」や「自閉症」や「動物」とする。だから、西洋の精神病理学や量子脳理論によれば、「自閉症者は、五感があって感情がない」とか「動物は、かろうじて認知能力はあるが思惟しない」といふ分析になる。

先の「心の理論」の無理解者としての自閉症が西洋の論文で用いられた場合は、「五感があって思惟・思考がない人間」のことを指している。岡潔の図に同じことを言わせると、西洋では「自閉症者には、友だちどうしでケンカをする本能的な競争心はあっても、知識に乏しく、感情はもっと乏しい」ことになる。むしろ、岡潔も私も、このようなもの見方に異論があるわけである。

#### ■現行の未分化的体感としての唯識

唯識思想では、これらの要素は全て現行（げんぎょう）（五感プラス意識Ⅱ六識）として刹那滅（せつなめつ）の原理の元に阿頼耶識縁起（あらいしきえんぎ）を反復していると見る。

阿頼耶識というのは、我々の身体に宿る、素粒子・アムーバ・霊長類時代から今の身体に至る全ての記憶の「薫習（くんじゅう）」された「場」で、本能である末那識の底にある。五感や自己意識というものは、自己の身体によるこの阿頼耶識の参照であると見なす。

このようなことが「ごく普通に」起こっている身体が、自閉症者やサヴァン症候群者の身体であろう、というのが私の考えである。彼らは、どの情報を探ってどの情報を切り捨てるか、ということを用意・思考しない。

その一の記事の交通事故の例で言えば、「事故車両は走行中に時間が遅れ、これを構成する量子としての素粒子の位置と運動量が同時に確定できない」という量子力学的事実と、「今事故を起こした人物はこの人で、事故車両はこれである」というニュートン力学的事実の両方を「知覚」してしまい、いずれが近現代的五感に立脚する法治国家における交通事故処理にとって「正しいか」が判断できない。

自閉症のサヴァンには、「今見た情報」どころか、「西暦何年何月何日に見た情報」なども写真のように覚えていたりする（カレンダー記憶など）人もいる。

だから、彼らにとつては、「五感で知覚」したものがそのまま「思考・思惟・意識」であると言えるのではないだろうか。「外界の情報」

をそのまま「受け取る」ということは、「素粒子は粒子性と波動性の両方を持つ」などということも最初から「見えて」いるかもしれない。これが自閉症者たちの世界認識であると、私は見ている。

このように、「あらゆる情報」を知覚してしまい、現代社会生活になじめないことが自閉症の特色だが、この「あらゆる情報」を唯識思想の「現行（げんぎょう）」だと考えれば、自閉症とは「五感が意識に同一である状態」、「内臓感覚がモノを考えている状態」を言うことになり、これを私は「古代人一般の標準的外界認識」であったとするわけである。

私の対女性共感覚も同じことだと考えていて、私は、「女性の排卵を知覚する」とことと「女性の排卵を思惟する」とことが同一であることが（人間を含めた）動物のオスの共有本能（本有種子（ほんぬしゅうじ））であり、ほとんどの現代人男性の「現行」が阿頼耶識を参照していないだけにすぎないと見なすので、先の（1）から（4）の前後関係が「逆転する」ことの方が「科学的真実」であるのは当たり前だと感じられる。

#### ■西洋ペイガニズムへの懐古

実は、キリスト教文明が世界制覇する以前の原始キリスト教、あるいは西洋にキリスト教が誕生する前のアニミズム（いわゆる侮蔑表現で言う「ペイガニズム」）にも同じ世界観があったと見ている西

洋人はおり、動物行動学者のジェインズなどは、「今の統合失調症者の精神構造は古代人一般の精神構造に同一である」などと主張したことがある。

実際のところ、宗教としてのキリスト教が他宗教を排撃するため、の侮蔑表現として「ペイガニズム」や「アニミズム」といった用語を生み出した歴史の経緯があるにもかかわらず、イエス・キリストそのもの、聖書そのものは、極めてペイガニズム的、アニミズム的な要素を含んでいるように見える。

（キリスト自身は、何も世界の宗教を一神教と多神教とに分別したわけではない。分別したのは宗教としてのキリスト教である。）

私も同じような発想をしており、「現代の自閉症者やサヴァン症候群者の世界認識の方が、西洋原始人及び近世以前の日本人全般の通常の世界認識であった」と見ている。これは、解離性障害についても同様で、古代日本女性の通常の世界認識が今の解離性障害であり、また日本女性の全員が「巫女」と呼ばれていた時代があったという折口信夫や中山太郎の説を私は支持するものである。

「人間以外の動物はエピソード記憶を持たない」という脳科学全般の合意がある。例えば、自分の子どもがいつ生まれたかということも、動物の母親は覚えていない「かのように観察される」。

ところが、私はそうは思わない。実際には、重度自閉症者や動物というのは、外界で生起しているあらゆる物理現象（相対性理論的・量子力学的・不完全性定理的な現象）と「現行」とが一致している境地、すなわち、「切り捨てているエピソード記憶や物理理論が一つ

もなく、全てが無意識の深層（阿頼耶識（あらやしき）に保存される）（現行薫種子（げんぎょうくんしゅうじ））と考えるわけである。

本来の唯識思想家は、「切り捨てない主体」が「人間の脳」であるとは限らず、動物の脳であつてもよく、植物や岩石であつてもよく、さらに素粒子一個が主体となるような「五感（感覚）」や「意識」があると考える。さらにそこから戻って、素粒子が量子として二重性（粒子性と波動性）を持つのと全く同様に、人間の自己と身体も実体性と非実体性の二重性を同時に持つと考える。

#### ■「愛をも絶する」愛としての禪的中観の境

ここに「中観」なる境地が生じてくることになる。「中観」とは、量子力学的な「真空」状態に「仮観」としての素粒子の「はたらき」を持たせることを指す、というのが私の言い方である。

「中観」の言う「はたらき」を持たせる主体が、唯識思想家に言わせても、西洋の一神教的な超越理念としての神には当たらないとする点、すなわち、アニミズム的・「ペイガニズム」的・多神教的自然信仰の全ての体験と記憶とを薫習する阿頼耶識だとする点は重要である。

言い換えると、「中観」とは、その「人間や動物植物や素粒子などの自己や身体や構造が実体性と非実体性の二重性を同時に持つと考えられる自己（識）だけは実在すると見なす境地（唯識無境）」を最終的に

「空」と諦観しつつ（空観）、「仮」の実体としての他者・自然界と関係して（仮観）生き続ける境地のことである。

すなわち、「中観」の「中」とは、「中庸」の「中」でもあり、かつ「中」の「中」でもある。「有る」に対して「無い」と言う時の「無」は、「空（くう）」とは異なっている。だから、「本来の唯識思想は必ず中観を志向する（境識俱泯（きょうしきくみん）」というのが、私の考えである。この「中観」の実践に当たるのが「禅」であると私は考える。

このような禅的境地としての「絶対無」こそ、先の『東洋的無』（久松真一）においてうまく説明されているものだろう。彼は、「東洋的無我」は「愛をも絶する」と述べている。まことにその通りだと思う。

先にも書いたが、重度の自閉症者・サヴァン症候群者には「心ない」と言われてきたし、マニュアルにもはっきりとこの言葉遣いで書かれていた。ましてや、「愛などというものは一生知らずに終える」と思われているかもしれない。ところが、ここで言う「愛」とは、岡潔の西洋の図の最上部の「情」であって、東洋の図の「情」ではないだろう。

私の考えでは、自閉症者には「現代の人間愛」がないだけである。非常に分かりやすく言って、「最重度の自閉症者は、相対的に人間への愛が希薄だと観察されるほど有り余る動植物・自然界への愛のために、本能的に西洋近代的な自己を閉じているのである」としてもよいと思う。

有り余る愛は、絶された愛と同じであり得るだろう。「人間愛」や「隣人愛」を超えて、いや、超えるのではなく人間の原点に前戻る形で「中観」される「動植物愛」や「素粒子愛」や「宇宙愛」のことを、久松真一は「愛をも絶する」「東洋的無」と言い、岡潔は「戦後日本人がどこかに捨ててきた」「日本の心」と言ったのではないだろうか。

そして、私は、「数学は西洋の学問として発生したが、やがて西洋の心の浅さに対する日本の情緒の深さが実際に数学的に証明できる」と岡潔が主張していたのと同じ原理で、「いわゆる鬱なる精神様態は日本的真情の表明であって、それがそのまま人間普遍の心理であった時代が過去にあることが、物理学的・数学的に証明できる（むしろ、それが物理学的・数学的に正しい）だろう」というような直観があってもおかしくないだろうと思う。

私には、岡潔は紛れもなく『中論』と『成唯識論』に書いてあることに、数式を持って帰ってきた、極めて少ない日本人自然科学者の一人であると感じられる。そして、もっと重度の自閉症者たちは、いわば数式を持たずに禅的境地・中観の境地のうちにひたすらとどまる。彼らは、禅的境地・中観の境地に至るまでに、唯識思想というレトリックさえ必要としない、私には感じられる。

#### ■参考文献

『岡潔集』 学術出版会、二〇〇八  
『情緒の教育』 岡潔、燈影舎、二〇〇一

『情緒と創造』 岡潔、講談社、二〇〇二

『春宵十話』 光文社、二〇〇六

『情緒と日本人』 岡潔、PHP 研究所、二〇〇八

『華嚴の思想』 鎌田茂雄、講談社、一九八八

『東洋的無』 久松真一、講談社、一九八七

■ 画像出典

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%AF%E8%AD%98>

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Lounge/6251/kouen.html>